

Reactions to Unexpected Events: The Naive Scientist and Interpretive Activity

E. Gil Clary (College of St. Catherine) and Abraham Tesser (University of Georgia)

Personality and Social Psychology Bulletin, Vol. 9, No. 4, 1983, 609-620

- 近年の説明過程の研究では、実際に産出された説明や説明に影響を与える要因について検証されている (Heider, 1958; Jones & Davis, 1965; Kelley, 1967, 1973)
 - より説明活動が行われやすくなるのは…
 1. その結果の影響力が大きいとき (Berscheid, Graziano, Monson, & Dermer, 1976)
 2. その社会的状況との関わりが深いとき (e.g., Harvey et al., 1980)
 3. 期待が裏切られたとき (Harvey, Harkin, & Kagehiro, 1976; Pyszczynski & Greenburg, 1981; Wong & Weiner, 1981)
- 特に3つめが注目されている
 - 想定外の出来事や一貫しない出来事があると、それに関与して理解しようとする (Harvey et al., 1980)
 - また、それらの出来事によって事前知識が揺さぶられ、制御感を得ようと解釈活動が起こる (e.g., Berscheid et al., 1976)
- 本研究では、想定内/想定外の出来事に対する解釈的活動について検証を行う
- 登場人物の想定外の行動を説明する方法は2種類に分けられる (Scott & Lyman, 1968)
 1. 弁明 (excuse) 想定外と認めるが、行動の責任は認めない
 - 例: テストの成績が悪かったのは、病気のため
 2. 正当化 (justification) 行動の責任は認めるが、想定外とは認めない
 - 例: テストの成績が悪かったのは、友人を勝たせるため
- しかし本研究では、定義を多少変更して用いる (Ross, 1977)
 1. 弁明 一過性なもののため、今後が予測しにくい
 2. 正当化 今後の行動が予測しやすい
 3. 却下 (rejection) 現在の出来事をもとに、事前の予想を覆す
 - 先に行った予想がそのまま保持される上記の2つとは異なる
- 想定内の出来事に対しては解釈や説明は行われず、注意をほとんど必要としない自動的な反応を見せるだろう (Shiffrin & Schneider, 1977)
- 一方、矛盾した情報に対峙したときは、顕在的なレベルで因果推論や説明に注意を割り当てるだろう

- 説明に認知資源を割り当てるため、副課題に対する反応が遅くなるはず
 - 説明に時間がかかり、因果を表す接続詞が多く観察されるはず
 - 最初に抱く期待の強さによって、これらの結果は変わるだろう
- 実験では聞いた話を伝達する課題を行い、その内容を分析する
 - 自然に説明が行われる状況であり、実験者の介入が最小限で済む

METHOD

Subjects and Design

- 心理学入門の受講生 68 名
- 2×2 の混合要因計画
 - 要因 1 初期段階の期待度 (強/弱: 参加者間) 教示
 - 要因 2 期待と結末の関係 (一致/不一致: 参加者内) 文章内容

Materials

- 3 種類の物語を用意
 - それぞれにつき、登場人物の性格のポジティブ/ネガティブ¹、期待と結末関係の一致/不一致で 4 タイプ作成
 - 例: ポジティブ・不一致条件で提示された物語

トムは自主性の高い大学生として知られている。身近な人たちからは、周りに流されずに自己主張のできる人物として知られている。グループになると、彼はリーダーに任命されることも多い。

その頃、ボブ・リード率いるジャズ四重奏団がトムの町に来ていた。トムは彼らのファンであるため、友人を誘って演奏を聴きに行こうと計画を立てていた。しかしその友人は、新作の映画「融点」を絶対に観に行きたいと言い出した。そこでトムは、友人と映画を観に行くことに決めた。

- 物語を聞いている最中に、クリック音がしたらボタンから指を離す (副課題)
 - クリック音は 1 種類の物語につき 2 回鳴る
 - 1 回目 第一段落の最終行の中でランダムに
 - 2 回目 第二段落の最終行が読み終わった直後

¹ 要因ではない

Procedure

- 事前教示
 - 「他人が話す日常的な出来事をどのように理解するかを調べる実験」
 - 話者についての情報により，期待度を操作
 - 期待度 強 「話者は登場人物のことをよく知っている人物」
 - 期待度 弱 「話者は登場人物のことをあまり知らない人物」
 - 「副課題として，クリック音が鳴ったらボタンからできるだけ早く指を離す」
 - 「聞き終わったら，物語の印象や感想が求められる」
 - 単なる記憶課題ではないことを強調
- 練習を1回行った後，本課題実施
 - 1 参加者は一致条件・不一致条件の2種類の物語をテープで聞く
- 伝達課題の教示
 - 「何も知らない相手に対して，今聞いた出来事を自身の言葉で分かりやすく伝達」
 - 単なる記憶再生ではなく，コミュニケーションであることを強調
 - 実際に相手はいないが，その代わりに録音
- 物語の内容についての手がかり再生課題を含むアンケート

Dependent Measures

- 伝達内容をもとに，以下の指標でコーディング
 - 説明的内容の有無（有 → 弁明／正当化／却下／その他）
 - 原因を示す接続詞の総数（“because”・“therefore”・“hence”など）
 - 新規に加えられた出来事の総数
 - 総単語数，総時間
- 再生課題の成績を0～3点で得点化
- 副課題のボタン離し反応時間（2回目のみ）

RESULTS

Explanatory Content

- 説明的内容のコーディングにおける，コーダー間の一致率は82% ($K = .633, p < .001$)
- 説明的内容の有無について2（期待度）×2（期待と結末の関係）の分散分析を行った
 - 期待と結末 一致 ($M = .10$) < 不一致 ($M = .32$) ($t(66) = 4.33, p < .001$)
 - 期待と結末が一致しない場合，伝達時に説明が加えられた（仮説と一致）

- その他は有意差なし
- 不一致条件で産出された説明のうち、45% は弁明、23% は正当化を含んでいた²
 - 却下については、一致 (17%) ≒ 不一致 (27%) ($\chi^2 = .02$)
- 原因を表す接続詞の総数について、2×2 の分散分析を行った
 - 期待度 強 ($M = 1.58$) > 弱 ($M = .94$) ($F(1, 66) = 7.61, p < .01$)
 - 期待と結末 一致 ($M = 1.12$) < 不一致 ($M = 1.38$) ($t(66) = 1.71, p < .05$)

Story Embellishment

- 伝達にかかった総時間・総単語数・新たに付け加えられた出来事の総数について、それぞれ分析を行った
 - 総時間において、期待と結末 一致 ($M = 48.65$ s) < 不一致 ($M = 52.72$ s)
($t(66) = 1.94, p < .05$)
 - その他は有意差なし ($F < 1$)

Recall

- 再生課題の得点について分析を行ったが、有意差なし ($t < 1$)

Cognitive Capacity

- 2 回目のボタン離し反応時間について、2×2 の分散分析を行った (Figure 1)
 - 交互作用あり ($F(1, 39) = 5.67, p < .03$)
 - 期待度 強において、期待と結末 一致 ($M = 401$ ms) ≦ 不一致 ($M = 465$ ms)
($t(39) = 1.46, p < .10$)
 - 期待度 弱において、期待と結末 一致 ($M = 463$ ms) ≧ 不一致 ($M = 382$ ms)
($t(39) = 3.67, p < .10$)
 - ◇ 期待度が弱い条件の結果は意外

DISCUSSION

- 先行研究と同様、想定外の出来事に対しては教示を行わなくとも、多くの説明活動が行われた (Harvey et al., 1980; Pyszczynski & Greenburg, 1981; Wong & Weiner, 1981)
 - 想定外の出来事を伝達するときには、原因を表す接続詞がよく用いられ、時間も長くかかった
 - 説明の形式としては、当初の期待をそのまま保持する弁明や正当化が用いられた

² p.2 枠内の物語を提示したときに観察された弁明の例「彼は気が変わっただけだ」；
正当化の例「コンサートに行くよりも彼は友人と過ごしたかったのだろう」

- 想定外の出来事に出くわすと、観察者として関与したくなる (Harvey et al., 1980)
 - ただ、想定外の出来事によって自身の考えが揺さぶられ、制御感を得ようと解釈活動が行われた可能性もある
- しかしながら、本研究の結果がすべて仮説通りだったわけではない
 - 総単語数・新たに付け加えられた出来事の総数では有意差が見られなかった
 - 参加者に与える情報がたった数行だったため？
 - 期待度が弱い場合、期待と結末が一致しないときのほうが認知的負荷が低かった
 - 事前の情報にあまり意味を成さず、活用する気がなかったため？
- そして本研究のさらに深刻な問題は、想定外の出来事について説明を行った参加者が全体のわずか 32% しかいないことである
 - 期待を保持する説明（弁明・正当化）は全体の 22% にすぎない
- 単に伝達する課題であるので、再生の正確さが重視されたのかもしれない
 - ベースラインは低いですが、条件間では仮説通りの結果が得られた

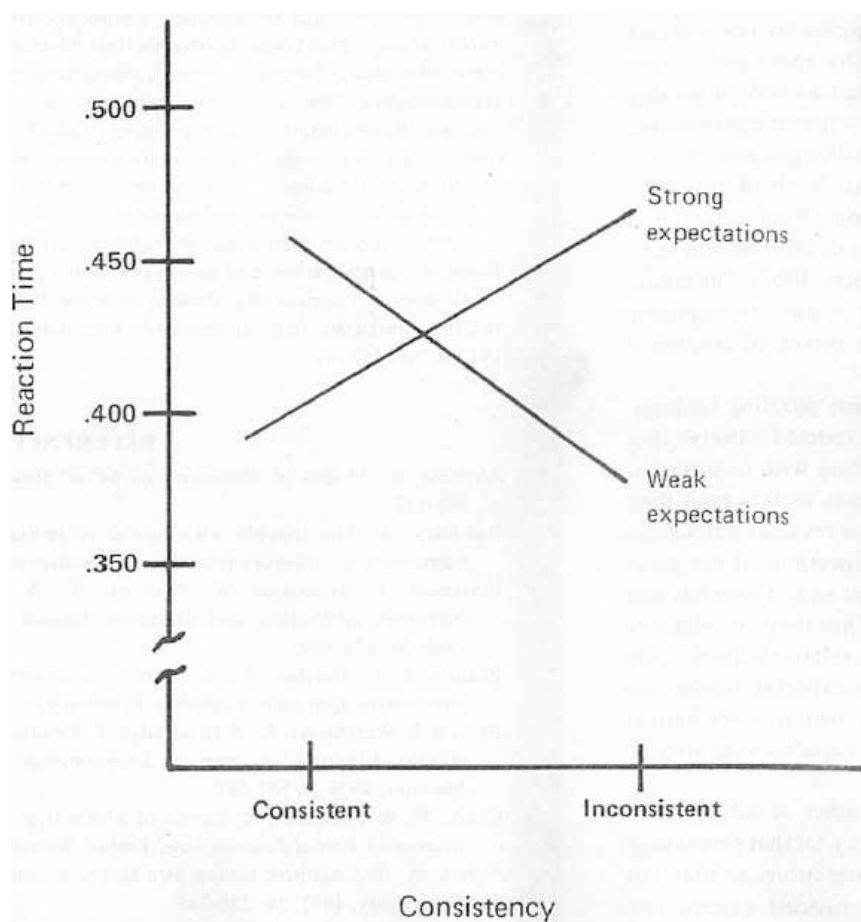


FIGURE 1 Interaction of expectation-strength and consistency on reaction time.